

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト(加藤) e-mail:sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



ラグコンをうつ女性-新疆ウイグル自治区カシュガルで- (2007年9月)
撮影:佐藤洋一郎

「コムギが生まれたころ」

連続公開講座「ユーラシア農耕史—風土と農耕の醸成」の第7回

有村 誠(東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター)

「コムギが生まれたころ」

連続公開講座「ユーラシア農耕史－風土と農耕の醸成」の第7回

有村 誠（東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター）

先日、タジキスタンのレストランでラグマンを食べた。ラグマンとは、中央アジアでよく食べられているコムギからつくった麺のことで、日本のうどんにそっくりである。タジキスタンのラグマンは、肉や野菜を煮込んだスープの中に入っていて、さらにその上に錦糸卵がのって、いかにも日本人好みだ（写真1）。タジキスタンには私が所属している東京文化財研究所の発掘調査で出かけたのだが、調査期間が長ければ長いほど、こういう日本食に似たものを食べると、疲れた心と胃袋がいやされる。



写真1. タジキスタンのラグマン

ラグマンやうどんの元となるコムギ。このコムギほど、世界中で加工食品となって食べられている作物はないだろう。コムギはもちろん、西アジアで栽培化された植物であり、今日、私がタジキスタンでラグマンを食べて一息つけられるのも、古代西アジアの人々のおかげだ。



さて、昨年11月22日に同志社大学で、連続公開講座「ユーラシア農耕史－風土と農耕の醸成」の第7回として、「コムギが生まれたころ」と題した講演会が開かれた。講演者は、丹野研一さん（前地球研・上級研究員、現山口大学・助教）、森直樹さん（神戸大学・准教授）、私の3人で、コムギの栽培化に関して、考古学、植物学、遺伝学のそれぞれの立場から話がされた。

講演終了後には、佐藤先生を司会に座談会も行われた。講演と座談会でふれられたテーマはさまざまだったが、ここでは私の興味のある2つのテーマを取り上げたい。コムギ栽培の起源地とコムギの栽培化にかかった時間の2つだ。

まず、コムギ栽培の起源地について。最古の栽培コムギは紀元前9000年くらいにあらわれる。丹野さんの話によると、新石器時代の開始から少し時間の経ったころ（PPNB前期）の遺跡からはじめて栽培コムギが出土するようだ。そして、その栽培コムギの故郷だが、「肥沃な三日月地帯」であるというのが長い間、定説であった。しかし、最近の考古学の著書を見ると、この地帯の中でも特に南東トルコが起源地といわれてきている。さらに、マメの栽培や動物の家畜化が始まったのもこの地域とされ、西アジアで生まれた農耕牧畜文化はすべて南東トルコに起源したとの説が有力になりつつある。この栽培化・家畜化（つまりドメスティケーション）南東トルコ起源説には、森さんらのコムギのDNA分析の結果、すなわち栽培コムギの南東トルコ起源という結果が、つよく影響を与えているようである。こうして、最近の考古学研究では、西アジアにおける農耕の起源地が単一（南東トルコ）であり、そこから農耕文化複合が周辺へと広がったという論調を多く見かける。しかし、私たちが調べてきた西アジアの初期農耕遺跡出土の植物や人工遺物の組成は一様ではなく、その地域性は無視できない。さらに、森さんが講演で話された、エンマーコムギのDNA分析の結果は、必ずしも単一起源を示していないとの話はとても示唆的だった。まだまだ確証はないが、植物の栽培化や動物の家畜化は、南東トルコといったある一カ所だけで始まったのではなく、西アジアの各地で同時並行的に行われていたという気がする。

もう1つの、栽培化にどれくらい時間がかかったのかという問題については、遺跡出土のコムギにおける栽培種と野生種の比率から、丹野さんが3千年以上という見解を公表している。

私も、農耕関連の人工遺物や遺構が変化・充実してくるのは新石器時代後半（紀元前7000年頃）からとみているので、丹野さんの考えに賛同している。おそらく、旧石器時代後期から末期にかけて穀物利用が少しずつ盛んになり、この流れの中で、最初の栽培種が新石器時代初頭（紀元前9000年頃）に出現し、



それから徐々に栽培種の占める割合が増えていった（本格的な農耕が始まる）というのが、ありそうなシナリオに思える。

公開講座を終えて、西アジアのムギ作農耕のはじまりにはまだまだ謎が多いと思った。その解明の糸口となる考古植物学の研究は、データの蓄積からみても十分でない。パレスティナやシリア・ユーフラテス河流域のように密に調査されている地域もあれば、まったく調査されていない地域もたくさんある。遺跡の土壌をサンプリングし、土をふるい、炭化物を顕微鏡下で選別・分類するといった考古植物学の研究は、地味だし、膨大な時間がかかるし、人手も必要だ。今から5, 6年前だろうか、シリアで寒い冬に、丹野さんが外で凍えながら、土を水で洗って炭化物を採取していた光景は、あまりに哀れで、良く覚えている。でもその時に採取した炭化物から多くのことが分かった。考古植物学は日本で簡単に学べるような分野ではないかもしれないが、将来的にこの道の研究者が増えれば西アジアの「コムギが生まれたころ」がより分かってくる。